『白孔雀』に描かれたジョージの堕落と，そのロレンスにおける意味について

石　川　勝　久

I

D. H. ロレンスの処女作『白孔雀』における中心的登場人物ジョージは，作品の第三部において次第に飲酒にふけり，精神的，肉体的に崩壊していく。しかしジョージは前半では粗野ではあるが土地に生きる農民としての健康な肉体と精神をもち，レティとシリルに素朴な彼の魅力をふりまいていた。特にアルコール中毒になってからの彼の凋落ぶりは目をおおわしめるものがある。この小論では，ジョージの堕落と崩壊の原因を探り，あわせてそういったジョージを生みだした作者ロレンスの当時の心境を明らかにしたい。

II

『白孔雀』の冒頭は次のような文章で始まっている。

私は水車用貯水池の薄暗がりのなかを影のような魚がすべってゆくのをじっと見ていた。それらは灰色で，この谷がまだ若く活気にあふれていた頃，修道僧たちのもとを逃れてきた銀色の魚の子孫であった。この場所全体が老年期のものおもいにふけっていた。向こう岸のこんもり茂った木々は暗く落ち着きはらっていて，太陽の光とたわむれることもなかった。あ

たりの雑草は密生していて動かず，小島の柳がゆらぐ風さえなかった。(p. 13)

小説の舞台になったネザミアという池とそのまわりの描写であるが，文字通り「眠り」の状態を呈している。そしてその近くにある農場に住む小説の中心的登場人物ジョージもその精神構造においてなかば眠っている。

「君の人生は寝ることばかりじゃないか。だれかが君をぐいっとひっぱって起こしたら僕は笑ってしまうだろうな」(p. 13)

こういった自然児ジョージをめざめさせるのは，彼の友人シリルとその妹レティである。

レティはジョージよりも社会的に階級が上で，知性もはるかにまさっており，音楽や美術にも造詣が深い。しかも彼女にはジョージの無知と粗野な振舞をあざけり，同時に彼を挑発するといった面もあった。

「あなたはこれが気にいっているんでしょう」とレティはすべてが分かっているとでも言いたげであった。それはまるで，こういった人間の気に入るためには魂の広大なページのなかから正しいページをめくりあてさえすればよいといった口調であった。(p. 28)

「私はあなたに教えてあげているのよ」と彼女は言った。「あなたが子供っぽくなるととても品があるわ。ふつうの男は，男の威厳が落ちるのをおそれてとても少年にはなれないのよ。そこでそういった男は哀れな馬鹿者になってしまうのよ」(p. 40)

レティはジョージの健康な肉体と精神に魅力を感じ，ジョージが麦刈りをし

ている時，思わず彼の腕をさわりたくなる程であった。彼女は彼に自分にはない生命の躍動を感じ，少年のように純粋なジョージを彼女なりに愛していた。一方ジョージは自分には欠けている多くのものがレティにある事を痛感し，もしレティがいなければ水にぬれた小麦の束のように自分はだめになってしまうとシリルに告白する。(p. 328)

レティとジョージの間にはおたがいにひきあうものがあることは事実であるが，レティは彼女の洗練された趣味を，彼を苦しめたり挑発したりする武器として使った。ジョージにとって彼女は「誘惑者」なのである。

レティは終始一貫してジョージを自分にひきつけて散々もてあそんだ結果，ジョージの性格をずたずたに引き裂いてしまう。つまり，二人の関係の本質を一言でいえば，ジョージに対するレティの誘惑にあるのである。

ロレンスはこの誘惑の主題を，バイブルのアダムに対するイヴの誘惑になぞらえて，リンゴや蛇のイメージを借りて語っているが，ロレンスが示している誘惑の概念は，必ずしもキリスト教における誘惑の概念と同じではない。

「リンゴの見せびらかし」とか，「禁じられたリンゴの魅力」というタイトルは，明らかにリンゴによるイヴの誘惑になぞらえたタイトルだが，レティがジョージを誘惑するのは主として音楽という美的なものによってである。この点は「ヴィジョンを売る者」という章でも同様である。ヴィジョンを売る人間というのはいうまでもなくレティであって，彼女はジョージに音楽や絵画の美を味わわせようとし，さらに料理の微妙な分析を強制しようとする。

『白孔雀』という小説を理解する上でもっとも大切なのは，こういうヴィジョンだとか美的なものという範疇が，人間的に望ましい価値を表わす概念では決してなくて，逆に人間を破滅に導く悪魔的な要因として描かれている点を理解することにある。そして白く燐光を放つ，その蠱惑的な力

を象徴するものこそ「白孔雀」というシンボルに他ならないのである。[1]

レティが音楽とか美術といった感性に訴えるものでジョージをめざめさせようとしたのとは対照的に，シリルは学問とか哲学といった理性に訴えるもので彼を「教育」しようとした。シリルがジョージに教えた内容は，化学，生物学，心理学，人生論，性およびその起源，ショーペンハウエル，ウィリアム・ジェームズ等であった。(p.75)

こういったレティとシリルによる「教育」の結果，ジョージはそれまで彼を支えてきた自然とその中で営まれる農耕生活に違和感をおぼえはじめ，自分の世界が一体何であるか分からなくなる。

「ここに僕をひき止める何がある？　谷はすっかり荒らされて，作物もつくっても利益があがらない。他人がどう僕たちを考えるかを考える自由もないし，あたりの何もかもがいつも同じで自分を変えることもできない。なぜかというと，見るものすべてが相変らず古い同じ感情しかあたえてくれず，新鮮な感じ方をするじゃまになっているからなんだ。一体何かに価するものがあるか？　僕の人生で持つに価するものがあるか？」(p.81)

「君は僕の人生を目覚めさせた――今では僕は以前の僕だったらけっして考えなかったようなことを考えている」

「ああ！――ほんとうにごめんなさい，ごめんなさい」

「気にしなくてもいいよ――ごめんなんて言うなよ。しかしこれから僕はどうなるんだろう？」(p.139)

以上の二つの引用で「僕」と言っているのはもちろんジョージであり，最初の引用ではシリルに，次の引用ではレティに話しかけている。

たしかにムアも指摘しているように，[2] ジョージはレティを得ようと努力すれ

ば得られたかもしれないし，シリルとレティの彼に対する「教育」の影響から自己を守り確立する意欲に欠けていた。この点でジョージは主体性がなく無気力であると言われてもしかたがない。しかし，この小説の第三部におけるジョージの惨めな堕落と衰弱の根本的原因はレティとシリル，とくにレティの彼に対する「教育」と，そのあとの面倒をみようとしない気ままさと無責任さにある。そして最初の引用にもあったように，ジョージが土地に対する愛着を失いつつあった事――地主の兎飼育による農地の荒廃化がジョージたちの経済的苦境を招いた――が彼の堕落と衰弱の間接的原因であると思われる。かりに農地がそれほど荒廃しなくても，彼が一生土地にしがみ続けたとは考えにくい。「教育」の結果ジョージはすっかり人間が変ってしまったのである。彼は自己の正体 (identity) を確認できなくなっており，いわば根こぎにされたも同然である。「教育」がそれをしたのは間違いない。エミール・デラベネは次のように述べている。

> ジョージの悲劇がレティの質問に対する答えを暗示している。つまり人類は原始的な素朴さから離れてしまい，現代生活に要求される果てのない適応は，意識が最小になり，本能がもっとも確かな行動の指針となるような生き方を否定しているという答えを。物語の最初からジョージは昔からの古いいなかの世界――自然に近い眠った世界――を代表している。ルソーの真の息子である彼は，食事の時間を知らせる時計を持つ必要がない。しかし彼よりも「高い教養」をもつ女性に対する愛情に刺激されてジョージが獲得する教育は，彼を眠りの状態からさまし，なかば教化されたままに放置するであろう。(3)

レティへの求婚失敗後，ジョージはすぐにいとこのメグと結婚するが，それはまるで失恋の痛手をいやすためであるかのように読者には見える。そしてレティとの交際中強く感じていた「階級の差」を解消するために，馬の売買の仲

買にも手を出し，それなりに成功を収めるが，次第に飲酒にふけるようになり，別人のように変貌していく。ジョージには昔のように土地にかえることもできず，心の空虚さを満たしてくれるものは酒以外になかった。メグもそんなジョージから次第に離れ，子供たちに生きがいを求めるようになる。そして彼は肉体的にも衰弱してゆくのである。

Ⅲ

シリルとレティの父親が物語の中でほとんど姿を見せないこと（長い間蒸発していて，突然死去が手紙で知らされる），ビアズオール（ロレンスの母の旧姓）家の社会的階級が実際の階級（労働者階級）よりも上昇していること――当時の文学上の慣習であることは事実であるが――等はロレンスの母親の彼に対する影響を抜きにしては語れない。『息子と恋人』において描かれたように，ロレンスの母親は厳格な清教徒で，酒びたりの夫を軽蔑し息子たちが父親の職業につかない事を願っていた。そして「息子であって恋人」であったロレンスは母親の期待と願望を強く感じていた。当然二十代前半の作品である『白孔雀』にもそれは反映され，彼は『白孔雀』をいわば母親に捧げたようなおもむきがある。

> 「『白孔雀』の図版がニューヨークから来た」と言われるのは，表紙のデザインの図版でしょうか，それとも何でしょうか。ちょっと知りたく思います。私はあの本は急ぎたいのです。自分であまり気にかけているのではありません。しかし，母が明瞭な意識のあるうちに，それを見せてやりたいのです。母はほんとにひどく病気が悪いのです。(4)

ジョージが本能と直観の世界に生きる自然児として登場しながら，自己の価値を認識せず，「生命の炎を否定」(5)するという誤りを犯したのは，当時のロレ

ンスがまだジョージの持つ魅力よりもレティやシリル等に代表される知性に一層魅力を感じていたことと関係がある。二十代前半のロレンスは読書欲がさかんで，絵もかいており，知性を否定する段階まで自己の思想が深まっていなかった。メアリー・フリーマンは次のように述べている。

> しかしレティは影のようで傍観者的なシリルよりも，当時のロレンスの考え方を一層よく体現している。彼女にロレンスは，苦痛と快楽を同時に味わいたいという彼の願望は英国中部地方において達成しうる，という証明義務を課した。(6)

いわば社会的階級を上昇したいというレティの願いは，同時にロレンスの隠された願望でもあるとメアリー・フリーマンは指摘しているわけである。ロレンスと彼の母は強い絆で結びついており，母の階級上昇への願望(7)が同時にシリルやレティ（当時のロレンスの分身）を生み出したロレンスの願望であったろうと推測できる。そういう心理状態の彼であったから，ジョージは素朴な生命感にあふれた農夫にもシリルやレティのような観念をもてあそぶ知識人にもなれず，いわば放浪者として終わってしまったのではないだろうか。当時のロレンスは，ジョージの表わす本能的，直観的世界の価値に心ひかれながらも，それを知性よりも深く根源的であると確信できなかったことがうかがわれる。

しかしそうだからといってロレンスがまったく母親に批判なしに従属していたとも言えない。猟場番人アナブルの激しい女性嫌悪，ジョージの妻メグの夫を疎外し子供たちを身方につけるありさまの描写，レティやエミリーの夫に対する支配的な態度の描写などにみられるように，ロレンスはすでに彼の母親の生き方や価値親に疑問をもちはじめていた。メアリー・フリーマンも指摘しているように(8)，彼は女性のなかに，男性を支配し従属させようとする傾向を認めていたのである。そして彼の現実に迫ろうとする努力はさらに，物語の背景になっている中部イングランドの自然がすでに産業化の波に洗われていて，かな

らずしも楽園ではないことをつきとめ，それを物語のなかに反映させようとした。

『白孔雀』の第二部では，初めから炭鉱の暗さ，ストライキ，サックストン氏の銃による兎の殺害など，残酷で暗いイメージが多く見出される。美しい自然描写にまじって，炭鉱の捲上機の影にかくれたスラム街などが時々頭を出す。これらは「人工の英国」，すなわち文明に侵されたものであるが，人間もまたこのような状況に直面して，牧歌的ユートピアの世界に浸りきったままでいる訳にはいかない。(9)

ロレンスの青春時代で，きわめて重要な役割をはたしたジェシー・チェンバーズ（『白孔雀』におけるエミリーのモデル）によれば，『白孔雀』の第一稿は「その背景を別にして，私には通俗小説的で，非現実的にみえた」(10)そうである。第一稿ではジョージとレティが結婚するそうで，ジェシー・チェンバーズにはそれが疑わしく思えたようである。その感傷的な第一稿をロレンスはすっかり書き直し，現行の『白孔雀』が完成したわけであるが，この最終稿において彼は今まで述べてきたように，産業化が自然界の中に侵入しつつあるさまとそれにまきこまれた人間の姿，および彼の母親を含む女性の男性に対する征服的態度を表現することができた。ジョージも第一稿よりははるかに複雑で真実味を帯びた人物になった。それなりにロレンスはより深く現実を見つめられるようになってきていたのであろう。

ジョージは単純で神を恐れる敬虔な郷士から，内面的成長が阻害される結果，その後の繁栄もくずれてしまう男に発展した。それは最初の構想からくらべると大変な進歩であり，私には不吉な予言者的性格をもつ人物のように思われた。(11)

ロレンスの現実理解がより徹底的なものであったら，ジョージはもっと本能的で直観力にすぐれた象徴的人物になっていたかもしれない。第一稿にくらべ，最終稿のジョージは確かに複雑な人物になっているが，所詮『白孔雀』執筆時のロレンスは，『息子と恋人』執筆時とは違って自分が属するうす汚れた炭坑の世界を外側から見ていた。[12] それで次第に現実がよりはっきりと見えつつあったとは言え，彼はシリルがほとんどいつもそうであるように，単なる観察者に終始してしまったと考えられる。ジョージはその結果，知性と本能のどちらの世界にも属せないまま，酒びたりになって堕落してしまったのである。作者ロレンスも二つの世界の間に立って，前途を暗中摸索していたことであろう。

〔註〕

テキストには，D. H. Lawrence, *The White Peacock* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1950) を使用した。かっこ内の数字はその引用ページを示す。

(1) 入江隆則，『見者ロレンス』（東京：講談社，1974），p. 39.

(2) Harry T. Moore, *The Life and Works of D. H. Lawrence* (New York: Twayne Publishers, 1951), p. 46.

(3) Emile Delavenay, *D. H. Lawrence: The Man and His Work*, trans. Katharine M. Delavenay (London: Heinemann, 1972), pp. 94-95.

(4) 伊藤整・永松定訳，『D. H. ロレンスの手紙』（東京：彌生書房，1971），p. 38.

(5) Moore, p. 48.

(6) Mary Freeman, *D. H. Lawrence: A Basic Study of His Ideas* (Gainesville: University of Florida Press, 1955), p. 22.

(7) Moore, p. 29.

(8) Freeman, p. 23.

(9) 古我正和，「『白孔雀』に見られる自然と人間」，『ロレンス研究 No. 1』（京都：D. H. ロレンス研究会，1973），pp. 40-41.

(10) E. T. (Jessie Chambers), *D. H. Lawrence: A Personal Record*, 2nd ed. (1935; rpt. London: Frank Cass & Co. Ltd., 1965), p. 116.

(11) *Ibid.*, pp. 118-19.

(12) 吉村宏一，「『白孔雀』の人物をめぐって——シリル・ビアズオールを中心に——」，『ロレンス研究 No. 1』，p. 59.